

宝島の歴史を辿る

台湾古道 を行く 第3回



旗尾山より望む高雄県美濃の田園

【文・写真】西 豊穡

玉山山脈最南端の旗尾山（標高 318 メートル）から望む美濃の田園地帯。この田園を潤すのは、高屏溪の支流・老濃溪から引き込まれた水で、その灌漑システムは日本統治時代に建設されたものだ。

日本統治時代、台湾総督府は、原住民を管制するため山を切り開くと同時に、生活・産業用水の確保のため、台湾各地に水利施設も建設した。その水利施設のなかには、今もなお現役で活躍するものがある。私は、それらを「水の古道」と呼んでいる。

水は田畑を潤し、電力を行き渡らせて工業を起こす。水をどう確保するかは、どの国でもいつの時代も最大の課題である。台湾近代化のベースになったのは、台湾総督府が心血を注いだインフラの整備であった。日本人技師らは、当時最新の土木・建築技術を台湾に持ち込んだ。今、台湾各地に残る優美で頑丈な建造物はその典型である。

驚くべきは、それらを設計・施工した先人達の知恵と苦労だけではない。今でもそこを滔々と流れ続ける水の清冽なことである。今回は、この「水の古道」を紹介したい。



美濃水橋と竣工記念石碑

〔上〕岡田安久次郎設計の美濃水橋。そのシンプルなデザインは水橋の役割をひと目で理解できる。もともとは木造だった。竣工から 80 年が経つが、今も現役で地元に貢献し続けている

〔下〕発電所の構外の道路脇に残る竹仔門発電所の竣工記念碑。誰も特別に管理しているわけでもないのに、地元民は発電所への思いがあるのか、今も石碑をそのままにしている。文字は後で黒に塗られた

田園を潤す発電所

「水の古道」と言っても、山あいのダム、発電所、田園地帯、都市部を問わず張り巡らされた水路と水門などさまざまな形がある。

これまで縁の下の力持ちだった「水の古道」に最近、ようやく陽が当たりました。台湾各地で紹介されるようになった。台湾では「古圳道」と呼ぶ人もおり、今では探訪ツアーもある。「圳」とは人工の水路のことだ。今回は、そのなかから、台湾で主要な古蹟の一つに指定されている竹仔門水力発電所と、獅子頭圳を紹介したい。

今、世界遺産登録にという声も聞かれる竹仔門水力発電所は、高雄市区の北に位置する美濃にあり、そこには客家文化が色濃く香る田園地帯が広がる。この田園地帯の背後には玉山山脈南端の低い山々が連なり、その山々がちょうど屏風のような趣になり、山紫水明の妙味がある。美濃の魅力は訪れる人々によりさまざま。客家料理をその一番に推す人もいるかもしれない。清朝時代からの古蹟も多く、歴史の街でもある。陶芸の工房も多く、各々特

色を競っている。

美濃の街を抜け、北隣の高雄県六龟郷に入る手前の県道脇に、「工業古蹟竹門発電廠」との道路標が立つ。その道路標識から入る狭い路地をしばらく進むと、「明治四十二年十二月二十廿七日」と太く彫られた人の背丈ほどの石柱が道路脇に忽然と立っている。その石柱が道路脇に忽然と立っている。その石柱を過ぎると、道路は真っ直ぐに発電所正門へと続く。

私は、この石柱が同発電所の竣工記念碑であることを随分後になってから知った。今さらながら竹仔門発電所の「明治」という年号には、驚きのひと言に尽きる。

さて、発電所の正門には「高屏発電廠竹門機組」の中文と英文プレートが掛かっている。「機組」の英訳は「Unit」、つまりここは、現在台湾電力が管理・運営する高屏（高雄・屏東）発電所の一分所という扱いだ。もう一つの分所は、お隣の六龟郷にある土壠発電所（1917年竣工）である。

正門の奥に横長の発電所本館が見える。薄ピンクで統一された壁の本館は博物館にでもなっているのかと思わせる趣だが、驚いたことに今なお現役の発電所である。発電所の心臓部、本

館内にあるドイツ製の発電機と水車は、創業時から2008年まで利用された。現在、発電設備は新館に移されている。何よりも、古色蒼然とした建物の佇まいとバロック様式と言われる斬新な意匠とのコントラストが美しい。当時の台湾総督府宮内課長・野村一郎による設計だ。野村は旧台湾総督官邸（現台北賓館）や旧朝鮮総督府庁舎などの設計を手掛けたことで知られる建築家である。

構内には外来の参観者のために各所に案内板が立ち、丁寧な説明が施されている。建物以外にも日本統治時代にまつわるものが当時の姿で保存されている。その代表が、中庭に並ぶ日本人



竹仔門発電所

〔上〕竹仔門発電所の本館正面、優雅なバロック様式の外観を持つ野村一郎設計による。「竹子門」、「竹門」が混在して使用されているが、日本時代の名称は「竹仔門」だ

〔中央右〕2年前まで稼働していた創業当時のドイツ製発電機と水車

〔中央左〕発電所本館側面、バロック様式を最も色濃く残す

〔下〕発電所から流れ出す獅子頭圳



台湾各地の「水の古道」※これは数多くある中の一部です。

① 白冷圳 (台中県和平郷・新社郷)

白冷圳は、磯田謙雄がサトウキビ種苗畑の灌漑のため設計し、1932年に完工した全長約17キロの水路。水源は台中県北部から台湾海峡に注ぐ大甲溪。標高500メートルほどのところにある取水口と出水口は、高低差はわずか20メートルで、その間を22本のトンネル、14架の水橋、3本のサイフォン水管で繋ぐ。2号管の巨大なサイフォンは台湾建築百景のひとつで、同百景最大の建築物だ。



緑色の水管が日本統治時代のもの。1999年の921地震で破損し、今は隣の水管が使われている

④ 八田興一と嘉南大圳 (台南県・嘉義県)

1920年から10年の歳月を費やし完成した満水面積1,000ヘクタールの烏山頭ダム(珊瑚潭)と総延長16,000キロに及ぶ灌漑水路。その設計、施工を指揮し、台南・嘉義に渡る平野を台湾第一の穀倉地帯に変えた八田興一は、妻の外代樹ともども悲劇的な最期を遂げたこともあり、台湾の恩人として、台湾の教科書にも登場する。今や日本でも知られるようになり、現在、烏山頭ダムを世界遺産に登録しようという運動も始まった。



烏山頭ダムの取水管

⑤ 曹公圳と竹寮取水站 (高雄県大樹郷)

高雄県と屏東県の県境を流れ、台湾海峡に注ぐ高屏溪の水を高雄地区一帯に配水する曹公圳は、清朝道光年間に開削が始まり、日本統治時代に多くの支線が設けられた。1911年竣工の竹寮取水站はゴシック様式と中国様式を折衷した斬新なデザインの建築物がほぼ当時の姿で残る。高屏溪に架かる下淡水溪鉄橋(通称高屏旧鉄橋)の高雄県側は旧鉄橋湿地教育園になっており、園内外に日本統治時代の遺跡・遺構が多く、曹公圳もそのひとつ。



曹公圳は台湾三大古圳の一つ

② サカダン歩道 (花蓮県秀林郷)

サカダン(砂卡礑)歩道は、タロコ(太魯閣)峡谷を流れるタツキリ(立霧)溪の支流にダムや発電所への送水施設を建設するため、1930年に開削された工事道。大理石の岩盤を人力で削り出したもので、全長4キロ強。往復約3時間で歩ける平坦な道で、豪快な渓谷美を楽しめる。



サカダン歩道(写真右側)



トンネルを指し示す標識。タマロワンはブマン語で雄鶏のこと

③ 原住民集落のトンネル水路 (南投県信義郷)

雲林県と彰化県の県境を流れる濁水溪中流域にある地利村(旧タマロワン社)に、日本統治時代に開削された長さ約50メートル、ひとり一人がやっと立てるほどのトンネルがある。同村の脇を流れ、濁水溪に注ぐ支流を水源とし、村に水を引き込む途中の小山を穿った水路だ。地利村の濁水溪を挟んで向かい合う双龍村(旧イシガン社)にも、双龍瀑布から村へ水を引き込む日本統治時代に敷設された水路が残り、今も利用されている。

⑥ 地下ダム・二峰圳 (屏東県来義郷)

当時台湾製糖株式会社の社長だった鳥居信平がサトウキビ畑への灌漑のため設計し、1923年(大正12年)に完工。水源は周辺にパイワン族が多く居住する林辺溪。水の豊富な雨季はそのまま河川を流れる水を利用し、河川を流れる水量が減少する乾季、旱魃時は河床下に潜った伏流水を集めそれを灌漑に利用する集水システムである地下ダムを含むため、今でも水利専門家の耳目を集める。



地下ダム横にある取水塔。昨年の台風で倒壊したが、ダムは機能している



技師殉職者の三基の慰霊碑だ。殉職の原因、時期は、感電死(1910年)、風邪をこじらせ病死(1927年)、取水池で作業中に転落、溺死(1937年)と三者三様である。本館脇に小さな寺があり、その寺を伝っていくと、本館の上部に出られる。発電所の構造を観察するには絶好の場所だ。美濃溪からの取水構造、沈砂池、最後は発電所本館へ落ちていく4本の圧力水管などの施設を見てみると、その後、何度か交換された部分があることが想像できる。一方で、発電所自体が竣工以来、百年を過ぎてもいまだに現役であることへの畏怖の念が湧き起

美濃に身を捧げた日本人技師

この発電所が果たした役割が簡潔に説明されている。当初は、高雄、台南地区への電力供給を担い台湾南部の産業発展に大いに尽力したとある。現在の発電量は美濃地区に必要な電力量の10分の1程度だそうだが、逆に、その数字はこの100年間の同地の発展指数とも言えるものだ。

当時、荒地だった美濃が今に見る美田に転じたのは、発電を終えた水を灌漑に利用する水路を整備したためだった。その水路は獅子頭圳と呼ばれ、今でも5000ヘクタールを潤す重要な灌漑設備である。獅子頭圳は街中も流れるので、単に灌漑水路というだけではなく、生活に密着した水の道である。今では獅子頭圳の沿線の一部にはサイクリングロードが整備され、誰でも手軽に水の流れると田園風景を楽しめる工夫が凝らされている。この獅子頭圳にはユニークな構造物

が残っている。水を河川越しに運ぶために設けられた幅1.8メートル、長さ120メートルほどの美濃水橋である。箱形のコンクリートの水路の上を今でもバイクや自転車に乗った人が行き来している。その水橋の袂には「昭和三年四月竣工」「設計監督 岡田安久次郎」と刻まれた「水橋改建記念碑」が佇んでいる。水橋、記念碑とも高雄県指定の古蹟だ。私はその後、同じ岡田の名前を意外な場所で見つた。それは、竹仔門発電所からわずかに離れた場所にある水徳宮という廟でだった。日本風に言えば水神様だが、実はこれは日本統治時代は同発電所の神社だったものだ。その境内に「岡田安久次郎君之碑」がある。獅子頭水利組合の初代組合長で、16年の長きに渡り美濃の灌漑に尽力し、当地で病没した岡田の経歴と地元民の感謝の言葉が刻まれている。「竹仔門発電所―獅子頭圳―美濃水橋」はこのような由縁でも繋がっていた。

■

水徳宮と美濃市街地

【上】竹仔門発電所のすぐ近くにある水徳宮。日本統治時代は神社だった。階段だけが当時のままである

【下】発電所を流れ出た獅子頭圳は、美濃水橋を通り、美濃市街地に流れ込む。美濃の街を流れる獅子頭圳は子供たちが水遊びをできるほど水が澄んで美しい

